
【今は昔】 転生！かぐや姫 【竹取の翁ありけり】

Tomo

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【今は昔】転生！かぐや姫【竹取の翁ありけり】

【Nコード】

N8876X

【作者名】

Tom o

【あらすじ】

“目を開けた俺の視界に最初に飛び込んできたのは、斧を構えて俺を見下ろす、身長30メートルはあろうかという超巨人の爺だった。”

▽ 試験勉強をしていたはずの俺が目覚めたのは、平安時代の平安京で、俺は光り輝く超絶美少女になっていた。しかも男装すると超絶美少年で、しかも無敵の身体能力に加えて魔法まで使える。俺が転生したのは、竹取物語の主人公、かぐや姫だった。

▽ 俺を面白半分で転生させた神をとっ捕まえて元の世界に戻させようとするが、京中の男どもから求婚されて大騒ぎに。人目を忍んで男装して搜索をしていると、今度は女どもからも追い回されて逃げ場がない。どうする、俺！？

▽ 主人公最強系異世界転生モノで、美少女、美少年、美女、美青年、ハーレム、逆ハーレムなんでもあります。ついでに陰陽術だか魔法だかなんだか分からないものも出てきます。衣装は平安時代の装束が中心で、男性は狩衣、女性は桂が基本です。バトル要素は薄いですが少しは入る予定です。恋愛要素については、まともな恋愛が成立する気はしませんが、求婚されたり手ひどく振ったりはします。

▽ 一応、全年齢対象です。想定読者としては、12歳以上のつもりで書いています。

壱・爺と婆

（んっ。どうやら寝ていたみたいだ）

目を開けた俺の視界に最初に飛び込んできたのは、斧を構えて俺を見下ろす、身長30メートルはあろうかという超巨人の爺おやじだった。

（うわー。こっ、殺されるー！）

俺は逃げ場がないかと左右を見ようとしたが、どうしたとか体が動かない。なんとか目だけで周囲を確認してみると、全身を布でくるまれて、風呂桶のようなものの中に入れられているようだった。

（なんなんだ、ここは。どうなってんだ）

爺は手のひらだけで優に2メートルはある手をこちらに手を伸ばしてきた。あの手に捕まったら、そのまま握りつぶされて、それで終わりだ。でも、逃げたくても体が動かない。爺は興奮した様子で、意味のわからないことを叫んでいる。

（やばい。死ぬ）

思えば短い人生だった。高校受験を耐え抜いて、何とか希望の進学校に入学して2年目の春を迎え、中間試験の勉強を部屋でしていたところまでは覚えている。

そうだ。部屋で古典の勉強をしていたはずなんだ。それがどうしていきなり命の危機なんだ！

（ああ、もうだめだ）

そう思った時、爺は俺を手のひらに優しく乗せて、どこかに運んで行った。

俺が連れて行かれた先は爺の自宅のようだった。巨人の家にふさわしい巨大な家で、爺の妻らしい巨人の婆ばばあがいた。婆は俺を見ると、やはり理解できない言葉を叫んで、顔を覗き込んでニヤツと笑って奥の部屋へ足早に歩いていった。

（今度こそ取って喰われる）

俺は、包丁を研いだ婆がいつ襲いかかってくるかと肝を冷やしていたが、爺に運ばれて奥の部屋に行くと、婆は包丁を研いでいたのではなく、布団を布いていた。俺はそこに寝かされると、急激に睡魔が襲ってきて意識を失った。

壱．爺と婆（後書き）

転生！かぐや姫をお読み頂いてありがとうございます。この話は竹取物語をベースにしている、男子高校生が平安時代に転生してかぐや姫になってしまふことで起きるドタバタを描いたコメディです。

異世界転生モノで主人公最強なコメディを書いてみようと思ってストーリーを考えていたときに、竹取物語をかぐや姫視点で見ると、このシチュエーションにぴったり当てはまることに気づきました。そこで竹取物語からストーリーと設定の骨子をもらって、ラノベっぽく（？）書き直してみたのがこれです。

それなりに時代考証して書いてますが、都合よく無視しているところもあります。例えば、成人男女がお齒黒をする風習とかは、絵面的にあれなので却下しています。

この小説は実験的に書いている小説なので、想定よりも人気が出ない場合や、その他事情がある場合は、途中で連載を中断することがあります。あしからずご了承ください。

括弧の使い分けは、○が心の声で、「」が古語の発話、『』が現代語の発話です。括弧は必ず改行されていて、冒頭に発話者の名前を付けています。発話者の名前がないときは、前後の文脈で指定しています。ただし、心の声は、特に発話者が書かれている時をのぞき、すべて“俺”の言葉です。

例）

俺「おはよう」

爺「おはよう」

式・可愛いは罪

どうやら俺が間違っていたようだ。まず、爺と婆が巨人なのではなく、俺がちびだったということらしい。でなければ、ハエがそんなに巨大なはずがない。推測するに、俺の身長は10センチメートルもないくらいだ。

次に、爺と婆は俺を食料とは見なしていないらしい。育ててから食うという可能性は否定できないが、今のところ甲斐甲斐しく世話をしてもらっている。

第三に、俺はどうやら赤ん坊だ。体がうまく動かせないのはそのせいだ。しかし、それだけではなく、どうやら俺は恐ろしい速度で成長している。事実、俺は数日の内に立って歩けるようになった。

第四に、俺はどうやら女だ。

（これは夢だ。夢に違いない）

爺に合う前の俺の最後の記憶は、自分の部屋で机に向かって古典の勉強をしていたところだ。読んでいたのは竹取物語。おそらく、俺は古典文学の持つ催眠効果によって、非自発的に眠らされたのに違いない。であれば、そのうち起きるはずだ。それまでゆっくり待とう。

爺は、俺と会ってから随分羽振りがよくなったようだ。少しずつ分かるようになってきた言葉を、断片的につないで推測するに、どうやら爺が竹林に入って竹を切るごとに、竹の中から金銀財宝が現れるらしい。新しく建てた鞍の中には、そうやって得た金銀財宝が

うなるように収められているということだ。

俺が爺に拾われてから、約1ヶ月の時間が過ぎた。俺は身長が推定120センチメートル程度まで伸び、日常会話にも不自由しなくなり、文字の読み書きも多少はできるようになってきた。現代日本ならちようど小学校に入学するくらいだろう。そんな時、俺は爺に呼び出された。

爺「竹姫。あなたに話があります」

俺「何ですか、おじいさま？」

竹姫というのは俺の名前だ。爺はよほど竹が好きらしい。俺の話し方が心の声と随分違うのは、俺がいままでこういう話し方しか習って来なかったからだ。不本意だが仕方ない。

爺「実は、あなたを見つけた時、一緒にこのような箱が入っていたのです。中には手紙が入っていたのですが、異国の字で描かれているため読めませんでした。これはあなたのものなので、あなたにお渡ししておきます」

箱は、白い木箱で、木の種類は分からないものの、非常に美しい継ぎ目のない箱だった。

俺「おじいさま、開けてもよろしいですか？」

爺「その箱はあなたのものです。自由にしなさい」

俺は優雅な手つきで（これもこちらに来てからの教育の賜物だ）箱を開けて、中の手紙を開いた。そして、驚いた。

（これは、現代日本語じゃねーか）

言葉が分かるようになって、初めて分かったことだが、俺がいるこの場所は、どうやら平安時代の平安京のようだ。俺が話すのは当然古語で、書くのも読むのも現代日本語とは似ても似つかないミミズのノタクリだ。

（現代日本語ってことは、この箱を残した野郎はこの時代の人間じゃねーな）

そんなことを考えながら、顔だけにはこやかに最上級の笑顔を作って、爺に向かって言った。

俺「ありがとうございます、おじいさまっ！ この箱は、竹姫の一生の宝ものにします」

爺はこの世のすべての幸せが一度に訪れたような恍惚とした表情をして、そのまま全身に電撃が走ったように体が硬直して、口から魂のようなものが出てきた。

（やばい。可愛いオーラを使いすぎた。このままでは爺が死ぬ）

俺はとっさの判断で手を伸ばし、口から出てくる魂を捕まえて、口の中に押し返した。

（あぶねー。危うく人を一人殺すところだった。可愛すぎるのも考えものだな）

そう。何を隠そう、俺は可愛いのだ。これは客観的な事実だ。なぜなら俺はまだ自分の顔をはっきりとは見ていない。この世界には現代のような機能的な鏡はないのだ。だから、自分が可愛いかどうか

かは偏に周囲の人間観察によるものだ。正確には、人間および動物だが。

俺が可愛いオーラを全開にして笑顔を作ると、それを見たものは、老若男女、人間動物を問わず、あらゆる生き物が幸せの表情を浮かべたまま悶絶する。心の弱いものは、そのまま二度と目覚めない。

初めのうちはそれが分からず、何人かは残念なことになってしまった。ただ、やつらはそろって、生きているときには見せたこともないような幸福の表情を浮かべていたので、遺族からは逆に感謝をされたのだが。

なんにせよ、俺はもう少し笑顔を作るときは気をつけたほうがいい。死なない程度に可愛いオーラを抑えることができれば、周囲の人を安全にこの世の天国に招待できるのだが、一歩間違えると本物の天国に行ってしまう危険がある。可愛い花には致死毒があるのだ。

式・可愛いは罪（後書き）

竹姫は幼名です。まだ子どもなので、正式な名前がついていません。

かぐや姫は3ヶ月で成人するので、正確な年齢は不明（定義通りには0歳）ですが、1ヶ月の時点で換算小学1年生程度で身長120センチメートルくらいということにしてみました。まあ、日に日に身長が伸びていくので、正確な値を決めても意味ないですが。

近い内にかぐや姫は成人してしまうのですが、成人したら身長はいくつくらいがいいでしょうね。年齢は3ヶ月後に20歳相当になってそこで打ち止めのつもりです。3ヶ月で成人するかぐや姫に年齢は無意味ですが、一応、現代に換算しても成人しているほうが、いろいろ無難だとは思うので。

ところで、竹取物語の舞台は奈良時代と想定されているのですが、本作では平安時代に変更しています。平行して平家物語を書いているので、時代考証がしやすかったのです。ちなみに、竹取物語が書かれた時期は平安時代だそうです。

参・式神と俺

爺と別れた後、俺は自室に戻って、もう一度例の箱を開けてみた。箱の中には手紙の他に、人型に切られた紙と、狩衣かりぎぬ、指貫さしぬき、立烏帽たてえ子こ、足袋たび、足駄あしだと、男性の普段着一式の形に切られた紙が入っていた。

まず、手紙を取り出して読んだ。そこには次のように書いてあった。

『これを読んだら、人目を忍んで上賀茂神社まで一人で来ること。人型の紙は姫ちゃんの身代わりに、その他の紙は姫ちゃんの変装に使ってね（＾－＾）v』

（…姫ちゃんって誰だよ）

手紙の2枚目には、今の屋敷から上賀茂神社までの手書きの地図が書いてあった。なんか、頼りない地図だが…。

（じゃあ、今夜、行ってみるか）

人目を忍ぶってことは、昼より夜のほうがいいだろう。幸い今日は満月だ。月明かりで夜でもなんとかなるだろう。ダメそうならさっさと帰って、日を改めて出直せばいい。

（後は残りの紙切れか。身代わりについて言っても、これをどうすれば身代わりになるんだ）

俺は人型に切られた紙を箱から取り出した。すると、その紙は光

を伴って消え、代わりに目の前に光と共に人が現れた。

(なっ、なっ、なっ)

俺は思わず大声を出しそうになったが、慌てて手で口を押さえて、すんでのところで堪えた。

落ち着け。俺は花も恥じらう男子高校生だ。例え突然目の前に人が現れても、大騒ぎするなんてみつともない。それが、推定小学1年生の裸の女の子でもだ。

女の子『よう、俺』

健全な男子高校生は、小学校1年生の女の子を見ても、可愛いなとは思わない。それ以上はない。しかし、この子は本当に可愛いな。まるでこの世のものとは思えないほどに：

女の子『あン。そんなに見つめちゃ恥ずかしい…』

俺『きつ、気色悪い声を出すな！』

裸の女の子が出した声に我に返った俺は、思わず叫んでいた。そしてその後、後悔した。今の叫び声で爺や婆や他の使用人たちが来るかもしれない。そうになったら、この状況をなんて説明する？

俺は女の子の口を抑えて耳を濟ませたが、幸い誰も気づかなかったようで、近づいてくる足音はしなかった。この屋敷は伝統的な日本家で、廊下を歩けば音がするのですぐに分かる。

女の子『あン。そんなッ。激しい、ン…』

俺『いい加減にしろよ！ お前は一体誰なんだ！』

いつまでも変な声を出している女の子に、俺は当然あるべき疑問をぶつけた。

女の子『俺だよ！ 俺』

俺『だから誰だよ！』

女の子『だから俺だよ』

俺『俺ってなんだよ。オレオレ詐欺か、お前は』

女の子『お前が呼び出したんじゃないか。お前そっくりの姿形をした、お前の身代わりの式神だよ』

なんだと？ これは俺だと？ 確かに身長も年齢もほとんど同じ

だ。顔は、いままできちんと自分の顔を見たことがなかったが、洗面の時に水面に映る俺の顔は確かにこんな輪郭だったかもしれない。

（しかし、なんて可愛いんだ）

俺はもう一度目の前にいるもう一人の俺を見た。それは到底人間とは思えないほどに可愛い女の子だった。五感を越えて心まで揺り動かされるような、そんな魅力があった。この子が大人になったら、世界中の男も女もすべてを虜にするような絶世の美女になるんじゃないだろうか？

式神（『女の子』）『あー、もしもし。ナルシズムに耽るのはいいんだが、とりあえず服を着させてくれ』

参. 式神と俺（後書き）

当面の間は、週2回投稿のペースで進めていきたいと思っています。

ところで、烏帽子は成人男性の服装ですが、長い髪を隠すためにわざと衣装として用意しています。

肆・男装女子

俺は、箱に入っていた男性物の衣類一式をかたどった紙を取り出した。これらもまた、光を伴って消え、光と共に本物の衣類となって現れた。

俺『とりあえず、これを着て、息を潜めといってくれ。家の人に見つかるやばい』

式神『えー、可愛いのがいいのに』

式神はぶつくさ言いながら、狩衣に指貫袴を身に付けた。それを見た俺は、信じられないものを見た気持ちで、視線が釘付けになった。

(何という美少年)

美少女から美少年への変装は、あまりにも自然でかつ突然だった。美しさは性別を越えるとしか表現しようのない、完璧な美少年がそこに出現した。

式神『姫。そのように熱い視線を注がれては、私も男としてそれに答えないわけには参りません』

そう言いながら、茫然としている俺の唇に、式神がその美しい美少年の唇を重ねようとした。

俺『なっ、ちょっ、おまっ、おっ、おれっ、なっ、おっ、おまっ、おれっ』

俺は、驚きのあまり、何を言っているのか自分でもよく分からないまま、式神を突き飛ばした。なんというクソ変態式神だ、こいつは。

俺『お前は、俺で、しかも女の子だろうが！ 何をやってるんだ！』

式神『シー。声が大きいよ。誰か来ちゃうかも』
俺『ッ！』

その時、向こうから廊下を足早に歩いて来る足音がした。

「竹姫さま。どうなされましたか？」

ふすまの影から現れたのは、侍女の雪^{ゆき}だった。裕福になった爺が俺のために雇った住み込みの世話係で、雪のように白い肌を持つところから、俺が雪という名前を与えたのだ。

ちなみに、この時代はまだガラス戸はおろか障子すらも発明されていない。格子戸という、細かい格子状の穴の開けて目隠しと採光を両立させようとしている戸はあるが、障子に比べると暗い。なので、基本的には部屋は戸^{みす}であり区切らず開放的になっていて、必要に応じてふすまや御簾や屏風で目隠しをする。俺の部屋の場合、普段は庭に面した側は採光のために開けていて、廊下や他の部屋からは部屋の中は見えないようにしていた。

俺「なんでもないのよ、雪。庭に綺麗な花が咲いているから、和歌でもと考えていたんだけど、うまく考えがまとまらなくて」

俺は、とっさに庭に咲いているあじさいを見て、適当な嘘をでっち上げた。式神は反対側の奥のふすまの影に隠れている。とりあえ

ず、雪をこの部屋から出さないと。

雪「まあ、それは素晴らしいですわ。あの花はあじさいという花でございますの。梅雨の季節に咲く花で、この花が咲き始めると、雨の季節がやってきますわ」

俺「まあ、あじさいというのですね。綺麗な名前ですわ。近くに寄って見てもよろしいかしら？」

俺はそういうと、雪を庭に連れ出した。これでなんとかごまかして、そのまま帰ってもらおう。なんなら和歌の一つも詠んでみれば、満足してくれるはずだ。

肆・男装女子（後書き）

和歌は当時の基本教養の上に、ポピュラーな娯楽でもありますので、7歳くらいだと子供らは和歌の真似事をして遊ぶのかなあと思ったり。

ところで、障子の誕生と普及は平安時代末期の平清盛が活躍した頃まで待たないといけないのです。平安時代は間仕切りの発達とそれに伴う室内空間の使い方が大きく変わっていった時代ですが、この話の舞台設定は平安中期で、障子はまだ誕生していないけれども、ふすまの普及でプライベートルームな個室という概念が徐々に生まれてきた頃を想定しています。

伍 いざ出発

夜になって、皆が寝静まってから、俺は式神を呼んだ。雪が帰った後、式神は、特に誰も使っていない隣の部屋に、不自然にならない程度にふすまを閉めて、隠れていてもらったのだ。満月の夜は、皆、なんだかんだと夜遅くまで起きているので、寝静まるまで時間がかかった。

俺『おい、式神』

式神『…』

俺『式神っ！』

式神『…』

呼びかけても全然返事がないので、仕方なく立ち上がってふすまを開けた。主人に世話をさせる式神なんて聞いたことがない。

俺『式神、何処だ？』

俺は、薄暗い部屋の中を見回して式神を探した。式神は、庭に面したふすまを開けて、庭がよく見える、月明かりで明るい床に横になっていた。

（無用心だなあ。誰かに見つかったらどうするんだ）

俺は式神を起こすために、近づいて顔のそばにかがみこんだ。

（なんて美しくて可愛らしい寝顔なんだ）

月の光に照らされた寝顔は、昼の明るさの中で見たよりもさらに

その美しさを増していた。あどけなさの中に、まだ幼いながらも艶やかさの萌芽が見られ、神々しいまでの完璧な美しさを持っていた。

俺は無意識のうちに、その顔をよく見ようと体を近づけていった。

(ッ！)

俺は、直感的に身の危険を感じて、体を後ろに反らした。

俺が退いた後の空間に、ワンテンポ遅れて式神が覆い被さる。

式神『あー、惜しい。もう少しで竹姫ちゃんのファーストキスだったのに』

俺『おーまーえーなー』

俺としたことが、容姿に見とれてこいつの本性を忘れていた。こいつはクソ変態式神だった。容姿に騙されてはいけない。

俺『とりあえず、さっさと服を脱げ』

式神『えー。竹姫ちゃん、意外にス・ケ・ベ…』

俺『とつとと脱げ』

式神に服を脱がせて、俺も服を脱ぐ。俺はなるべく式神の方を見ないように気をつけた。裸を見るのが恥ずかしいというのもあるが、容姿の美しさに見入ってしまったって、また式神につけ入られることを警戒したためだ。

お互いの服を交換して、式神は竹姫の格好になり、俺は男装した。乙女の身だしなみとして伸ばしている髪は、立烏帽子の中にしまつて、女性の痕跡を消した。

俺『じゃあ、行ってくるから、お前は俺の身代わりとして、あそこの布団の中で寝てろ。朝までには戻る』

そう言っつて、俺は足袋を履き、足駄を履いて、庭に降り立った。

庭は月明かりに照らされて青白く輝いていた。時折、雲が月を隠して辺りが闇に包まれるが、またすぐに月が顔を出して辺りに光が戻る。

（よし。行こう）

俺は意を決して屋敷の門に向かって歩き始めた。

伍 いざ出発（後書き）

転生して1ヶ月目が満月ってことは、転生して竹の中で発見された時も満月だったんですね。今、気づきました。それはともかく、平安時代の人は月を見るのが大好きみたいなので、きっと満月の夜は毎月飲み会なのでしょう。

陸 夜道に注意

屋敷の門に門番がいたのは想定外だった。どうしたものかと思案したが、月が雲に隠れてあたりが暗くなったところで、石つぶてを投げて反対側の猫を驚かし、門番がそちらを見た隙について、門をくぐり抜けた。幸い門番には気づかれなかったようだ。

（自分でやっというてなんだが、こんな簡単に通れて本当に大丈夫なのか？）

自宅のセキュリティに疑問を感じたが、その件の追及は後にして、時間を無駄にしないために俺は全力で走った。

（なんだこれは…）

俺は、走り始めてすぐに異変を感じた。まず気づいたのは、周囲の景色が流れる速度が異様に速いのだ。まるで車窓から景色を眺めているような速度で、とても推定小学1年生が走っている速度ではなかった。

（これはつまり、俺の足が車並みに速いってことか）

足の速さに気を取られて、もう1つの異常に気づくにはしばらく時間がかかった。満月の夜とはいえ、街灯もないのにもかかわらず、周囲の景色がはっきりと見えるのだ。しかも、月が雲に閉ざされても、暗くなったと感じるものの、ものの輪郭は正確に認識することができる。

もっと不思議だったのは手紙だ。道に迷わないために、手書きの

地図の描かれた手紙を持ってきたが、普通は夜の闇の中では、例えば月明かりがあったとしても手紙を読むことはできない。しかし、俺は何の苦勞もなく手紙に描かれた地図を読んで道を確認している。

（俺の体は不思議なことばかりだな）

確かに、俺の体は不思議なことだらけだ。まず成長速度が異常だ。たった10センチメートルの身長しかなかった赤ちゃんが、わずか1カ月で身長120センチメートルの推定小学1年生に成長したのだ。

さらに、あの式神が本当に俺とそっくりなら、あの美しさは尋常ではない。人間として存在できる限界の美しさを越えていると思える美しさだ。可愛いオーラで人を死なすなんて後にも先にも俺くらいだろう。

そんなことを考えていると、俺は分かれ道に出くわした。地図を見たが道は一本道だった。困ったなと思ってキョロキョロしていると、首筋にヒヤリとしたものが当てられた感触がした。

男「動くな。荷物も服も身ぐるみ置いていけば命だけは助けてやろう」

顔を動かさずに目だけで首もとを確認すると、首筋に当てられているのはどうやら衛府太刀えふのたちと呼ばれる日本刀の一種のようだった。刃先は首筋を向いておらず、刀の背の部分が押し当てられていた。より恐怖を感じさせるために、鉄の感触がしっかりと伝わるよう、切れない側を押し当てているのだろう。

（これなら…、いけるか？）

背筋も凍るこの状況で落ち着いて状況を分析している自分の冷静さが不気味に感じたが、ここで身ぐるみ剥ぎ取られるわけにはいかない。幼いとはいえ俺は女だ。無事に解放されない可能性は男よりもはるかに高いだろう。

チャンスは一度。刃先がこちらを向いていない今を逃しては、次にいつ好機が訪れるかわからない。俺は呼吸を整えて後ろの追い剥ぎの気配を伺った。幸い、気配は後ろの男一人しか感じられない。共犯がいないなら、この男を無力化すれば完了だ。冷静に呼吸を読んで、男が息を吐ききったところで仕掛ける。

（今だ！）

首筋に押し当てられている太刀を逆に押し返すように体重を預け、太刀の動きを封じながら、そのまま太刀の背を伝うように振り向く。狙うは急所への一撃。身長差を考えれば股間が一番狙いやすいが、体を半身にしていると命中させにくい。背後を取られて男の姿勢が分からなかったので、股間を狙うのはリスクが大きかった。だから、ここでの狙いは肺。できれば心臓。息を吐ききったところへの一撃で、一瞬呼吸困難にさせ、その隙に足の速さを生かして逃げる。

大人の男が相手なら、身長120センチメートルの俺にとって、肺は頭よりも高い位置にある。車並みの速度で走る脚力があるので、助走さえあれば掌底を当てればそれで十分だろうが、残念ながら助走距離はほぼゼロだ。ならば未知数の腕力に頼るよりは、常識はズレな脚力を信じて飛び蹴りをする方が成功率が高い。俺は、刀を持つ男の手を掴んで自分の方へ引っ張り、全力で踏み切って男の胸を蹴り上げた。

陸 夜道に注意（後書き）

「俺」が駆け抜ける道は、おそらく堀川通を北に向かっていてのだと思われまゝ。基本的に上賀茂神社まで一本道ですが、途中、賀茂川を越えるところで道に迷ったと推測されます。

太刀とは刀の形状と長さによる分類です。長さは60～90センチメートルくらいです。現代、一般的な日本刀は打刀と言いますが、平安時代ではまだ打刀は登場しておらず、太刀が一般的な刀でした。衛府太刀とは太刀の拵えによる分類で、宮中や市中の警護を司る五衛府（後に六衛府）の武官が実戦用に持っていた太刀のことです。時代が下るに従って豪華な儀礼用の太刀として進化しますが、この頃はまだ実戦用に使われていた時代でした。

「俺」目線では、拵えは見えないので、正確には衛府太刀かどうかを判断することはできないですが、当時の六衛府の武官が使っている形状の太刀であるところから、「俺」の常識に照らしあわせて衛府太刀と結論づけています。

漆 無敵のム

俺の脚力は、俺の想定をもう少し上回っていたらしい。胸を蹴り上げられた男の体は、そのまま宙を舞って、3メートルほど離れたところに墜落した。俺の方は、蹴り上げた後もまだ勢いが残っていた、そのまま空中で1回転して、四つん這いの状態で地上に着陸した。

（おいおい。これは何の冗談だよ）

これではまるで格ゲーの主人公ではないか。一体どうなってるんだ、俺の体は。

男が持っていた太刀は、少し離れたところに落ちていた。これが間違っって俺の頭の上に落ちていたらどうなってたんだろう。近づいて柄を手にとってみて、少し振ってみた。

（意外に軽い）

いや、軽いのではなく、俺の腕力が例によって異常なのかもしれないが、とにかく十分に振り回すことができる重さだった。長さは80センチメートルくらいで、俺の胸の高さくらいはある。刀の大ききの標準がどのくらいかはわからないが、多分、体の大きさに対しては大きい刀のはずだ。

太刀を持ったまま、3メートル先に墜落した追い剥ぎに近づいて、太刀の鞘を取り上げた。男はまだ伸びている。

（せっかくだから、護身用に一本いいかもな）

ちゃっかり追い剥ぎから太刀を拝借することにして、先を急ぐことにした。拝借と強盗の違いがどこにあるのかについて、興味深い議論をすることはまた今度にしようと思う。ちなみに、衛府太刀は六衛府の武官が用いるものなので、追い剥ぎが持っているということは、誰かから奪い取った可能性が高い。

とまれ、そんなうんちくは置いておいて、先を急がないと夜が明ける。

（おっと。分かれ道なんだった）

こいつに襲われて忘れていたが、ここで右に行くか左に行くかを悩んでいたんだった。地図を見ても分からないし、どうしようか。

（そうだ、こいつに聞けばいいじゃないか）

倒れて伸びている男を起こして道を聞けばいい。俺って頭いい。太刀も取り上げたし、起こしても危険はないだろう。さて、どうやって起こそうか。

水でもぶっかければいいかと思って周りを見てみたが、かけられそうな水はなかった。

（うーん。困った。あんまり手荒なことはしたくないし…）

寝ているところに水をかけるのが手荒でないかどうかには議論があるが、ともかく周囲を歩いて何か代わりに使えるものがないかと探した。で、いいものを見つけた。柔らかい毛が沢山生えている草だ。

俺はその草の、なるべく背丈の高そうなのを選ぶと、なるべく端の方を持って、反対側の毛の多い先端を、男の横の方から伸ばして鼻先をくすぐった。

（うしし。これに耐えられる人間なんて、この世にはいないだろ）

追い剥ぎ「ふえ、ひあ、ほわ、ふっ、うつ、はっ、はっくしよいつ、くしよっ、はっ」

人間って、こんなにいろんな音を、くしゃみの時に出すんだと感心するほどバラエティ豊富な音を出してくしゃみをした後、男は目を開けた。

俺は、抜き身の太刀を持って、まだ頭が朦朧としている様子の男の前に仁王立ちに立った。満月がちょうど俺の正面に来て、俺の姿を明るく照らした。

男は目の前に立つ俺を見て、驚きの表情を浮かべていた。

漆 無敵のム（後書き）

本文とは関係ないけど、打刀は刃を上にして差しますが、太刀は刃を下にして佩きます。

捌 ああ八幡様

追い剥ぎ「八幡大菩薩様…」

俺『は?』

(何を言っているんだ、この男は。打ち所が悪くて、頭がおかしくなってしまったのか?)

男は突然我に返ると、慌てて体を起こして、頭を土にめり込ませるほどに土下座をした。

追い剥ぎ「おっ、お許し下さいいっ。八幡大菩薩様とは全く存じ上げず、このような狼藉に至ったことは、深く深く反省しております。どっ、どうか、いっ、命だけは。お助けいただければ、すぐに出家して、生涯を仏道にお捧げいたします。もう2度とこのようなことはいたしませんっ。どっ、どうか…」

(菩薩? 仏道?)

俺は、頭にはてなが10個くらいついた状態で、男の熱弁を聞いていた。とりあえず、この男が何か勘違いしていることと、俺をひどく怯えていることは分かった。話の流れが読めないが、とりあえず、話を合わせておくか。

俺「うむ。反省しているのなら、今回は許そう。だが、今度だけだ。分かるな」

追い剥ぎ「あっ、ありがとうございます。今後は八幡大菩薩様に深く帰依致しまして、そのお姿を心に留め、念仏修行に勤しみたいと思います」

俺「そうか。では頑張ってくれ。ところで、上賀茂神社に行きた
いんだが、どの道分かるか？」

追い剥ぎ「上賀茂神社でございますか。でしたら、右の道を進ん
で川を渡って次の角を左に曲がれば後は一本道でございます」

俺「ありがとう。それとこの太刀だが、お前にはもう必要のない
ものだ。頂いて行ってもよいかな？」

追い剥ぎ「喜んでっ！」

（なんか、追い剥ぎがキラキラした目で俺を見てる。き、気持ち
わりー）

とりあえず、道は分かったし、太刀も合法的に譲渡されたし、も
うこの男には要はないのでさっさと先を急ぐことにしよう。男のキ
ラキラがどういう意味なのか分からないが、改心したみたいだし、
いい変化に違いない！

俺「では、達者でな」

俺は、太刀を鞘に収めると、踵を返して人間離れした速度でその
場から走り去った。一路、上賀茂神社へ。

後日談で、京でちよつとばかり名のしれたならず者の悪三郎とい
うのが、突然^{ほっしん}発心して、出家入道して念仏修行に明け暮れるようにな
ったということで、噂になったらしい。まあ、俺には全く関係な
い話だが。

さて、道は本当に一本道で、俺は迷うことなく神社にたどり着い
た。そこは想像以上に大きな神社で、よく手入れされた林に囲まれ
た広い参道が北に向かって伸びていた。

走っているときには気づかなかったが、あたりをホタルが飛び交って、幻想的な風景を作り出している。元気なものは二階建ての屋根の上の高さほどもでも飛ぶものもいて、まるで参道が動く電飾で飾り付けられているようだ。

（すげ…。綺麗だ…）

俺はすっかり目的を忘れて、幻想的な光景に見とれたまま歩いてきた。一ノ鳥居をくぐって参道を進み、二ノ鳥居の付近にたどり着いた時、事件は起こった。

捌 ああ八幡様（後書き）

八幡大菩薩とは代表的な神様の一つで、天照大御神に続く皇室の守護神ということになってます。本社は大分の宇佐神宮ですが、京都の石清水八幡宮も同じくらい有名です。この神様は阿弥陀如来の化身ということになっていて、阿弥陀如来といえば浄土信仰で念仏です。なので、「俺」をうっかり八幡大菩薩と間違えた追い剥ぎは、改心して念仏に勤しむことを決意したのです。

平安時代の念仏は、あの「なんまいだー」と唱えるやつではなくて、文字通り「仏を心に念じる」というやり方をしていたそうです。なので、わざわざ出家して修行しないとできない、それなりに敷居の高い修行だったようです。

この時代、「悪」というのは「強い」というような意味だったらしいです。例えば、「悪僧」という言葉は「僧兵」を意味していました。通り名に使われることもよくあったようです。「悪三郎」は、現代的に言うところの「狂四郎」みたいなニュアンスで理解してもらえるといいかなと思います。

玖 お前は誰だ

『ふむ。思ったより早かったかな』

突然、現代日本語で話しかけられると同時に、背中と胸に温かくて柔らかな感触が広がった。

(ッ！)

驚いて脇のあたりを見てみると、狩衣の袖の付け根から、誰かが手を差し込んで俺の胸を触っている。

俺『何をやってるんだ、この変態が！』

俺は差し込まれた手を引き抜いて、そのまま手を引っ張ってぶん投げた。比喻じゃなくて、文字通りぶん投げた。あれ？ 俺ってこんなに腕力あったんだ。

背後から胸を触っていた変態は、そのまま前方に飛んでいったと思ったら、空中でふわりと浮かんで停止した。

それは淡い光に包まれた、この時代には珍しいショートヘアーの女の子で、白い小袖に薄紫の袴を穿いて、淡い桜色の桂を着、その上から金色に輝く透き通るように薄い衣を纏っていた。袴の裾も桂の袖も、この時代の標準よりも短めで、現代的なセンスをしていた。生地は絹よりも薄く滑らかで、これまでに見たどの生地よりも美しいものだった。

女の子は、ゆっくりと高度を下げて、俺の目の前に立った。その

身長は俺よりも高く、おそらく155センチメートルほど。現代人なら中学生くらいの身長だろうか。ただし、俺のちょうど目の高さにある胸は、とても中学生レベルのものではなかった。

（さっき、背中に押し当てられていたのはこれか）

俺の視線は、思わずその質量体に釘付けになっていた。この身長差を考えるに、さっき胸を触られた時は、おそらく中腰で抱きついて来たのだろう。

女の子『大丈夫。今は残念だけど、いずれ大人になるから』

そう言うや否や、再び一瞬で背後を取られて、狩衣の袖の付け根から手を挿し込まれ、今度はさっきよりも大胆に胸を触られた。

俺『いちいち触って確認するな！』

そう言っただけは再び差し込まれた手を掴んで、女の子をぶん投げた。まるでデジャブを見るように、女の子の体は再び宙を舞っている。

俺『おっ、お前は誰だーっ！』

俺はその当然の疑問を、今更ながらに大声でぶつけた。そして、二度と背後に回りこまれないように、太刀を引き抜いて女の子に突きつける。いきなり胸を触られて、俺の目は少し涙で潤んでいるかもしれないが、そんなことを気にしている場合ではない。

女の子『あれ？ 知らない？』

女の子は、突きつけられた太刀を完全に無視して、意外そうな表情でやや不満そうに言ったが、こんな変態の知り合いがいる訳がない。

俺『知るか！ お前は誰なんだ！ 俺を呼び出して何の用だ！』

女の子『あつたしは、天照ちゃんだよー』あまてらす

（こいつ、今、自分のことをちゃん付けで呼んだよ！？）

どうやら、この子はかなり痛い子のようにだ。それにしても、どこかで聞いたことがある名前のようだが、と俺は頭の片隅10%くらいを使って、自分の記憶を探ってみた。

俺『つて、天照大御神か、お前は！？』あまてらすのおおみかみ

ちょっとエクスクラメーションマークが多すぎる。もう少し落착け、俺。

玖 お前は誰だ（後書き）

平安時代の美醜の概念は、現代とは違うので、ふくよかな胸に対する評価も違う可能性が高いですが、まあその辺は適当に無視します。当時の女性の結婚適齢期ではまだ体は発育途中のはずですが、だからといって未発達な女性が美人と思われていたかどうかは分からないわけで、はっきり言ってそこら辺の好みはよくわかりません。

今日の活動報告にスポイルしない程度のネタバレ話を投稿しました。興味あればそちらもどうぞ。

拾 21世紀少女

天照大御神。さすがに現代人の俺でも知っているこの神様は、三重の伊勢神宮に祭られている神様で、天皇のご先祖様ということにされている。こっちに來てから得た知識では、太陽の神様であり、大日如來の化身であり、女神だ。

（女神と言うか、女の子だな、これは）

神様らしいところは、光っているところと宙に浮く所くらいか。そうでなければ、自分をちゃん付けで呼ぶ痛い変態痴漢女子でしかない。

天照『そう。その天照ちゃん。頭が高いぞ。もっと平伏せい（笑）俺』で、その天照が俺に何のようだ』

俺は太刀の切っ先を天照に突きつけたまま、呼び捨てで問いかける。こんな所で太刀を収めて平伏したら、その後、どんなことをされるか分かったものではないと、本能が警告している。

天照『暇だからー、あつそぼうよっ』

天照は、軽く太刀の先に触れると、そのまま太刀を横にずらして、グイッと間合いを詰めてきた。あまりに意表をついた動きに、俺は太刀を構え直すこともできず、天照の侵入を止めることもできなかった。

（何！？）

あまりの急接近にバランスを崩した俺は、思わず尻餅をついた。

天照『だーいじょうぶー？』

そう言って、天照はへらへらと笑っている。この緊張感のなさどさっきの体のキレのギャップが酷い。神様を名乗るだけあって普通じゃないってことなのか。

俺『遊ぶために俺を呼び出したのか？』

天照から差し出された手を無視して立ち上がった俺は、再度、天照の意図を確認した。

天照『そーだよー。せっかく21世紀から連れてきたんだから、目一杯遊んでもらうんだからねっ』

（21世紀って、平安時代でその表現を聞くとは思わなかった…、って）

俺『21世紀から連れてきたってどういうことだ！？』

天照『ひ・ま・な・の』

俺『どういうことなんだ！！？』

天照『ひーまーー』

俺『おい、天照っ！』

天照『天照じゃない。天照ちゃんだよっ！』

（なんてこった。てっきりちよつと長くてリアルな夢なのだと思っ
て、何か変だなとは思っていたけれど、本当に平安時代に来てしま
っていたなんて）

俺は、話の通じない天照を目の前にして、しばし茫然としていた。

天照『ねえ。あ・そ・ぼ。ねえ。ねえ』

俺『…、遊んだら、21世紀に戻してくれるのか？』

天照『うん。戻してあげるよ』

あまりにあっさり天照に肯定されて、俺はちょっと拍子抜けしてしまった。

俺『ちゃんと元の時間の元の場所に帰れるのか？ 浦島太郎って

ことにはならないよな』

天照『…、まー、大丈夫かなー』

俺『まー、ってどういうことだよ』

天照『まー、大丈夫ってことだよ。気にすんな！』

俺『気になるよっ！』

天照『天照ちゃんに任せておきなさい。こう見えても日本で一番偉い神様なんだゾ（はあと）』

（全く信用できない…）

拾 21世紀少女（後書き）

今回は、うんちく話はなしです。天照の件は本文中に書いたもので。

拾巻・AMVTERASU

頭の危ない女の子（天照大御神）とまともに話しても埒があかないと悟った俺は、遊んだら元の時代と場所に戻してくれるという言葉を取りあえず信じることにして、天照が満足するまで遊んであげると決意し、ひとまず太刀を鞘に収めた。

俺『で、何して遊べばいいんだ？』

天照『デュフフフフフフフ』

（きもっ）

天照は、黙っていれば超美形だ。美人というより可愛い方面で。その上、あの破壊力抜群の胸だ。少し低めの身長と相まって、ある種の属性持ちなら一撃で瀕死間違いないだし、そうでなくても思わず見入ってしまうほどの容姿だ。これで、俺が時々やるように可愛いオーラを飛ばしたら、死者が出ることは想像に難くない。黙っていれば。

（これを残念と言わないで、何を残念というのか）

不気味な笑い声を上げる天照に向かって、俺はあからさまに残念な何かを眺める視線を送った。天照は、頭の中で何か残念な妄想にふけっているらしく、どこでもないところを見ながら、表情をコロコロと変えている。

やがて、天照が俺の視線に気づくと、ニヤニヤとにやけながら、さっきの返事を返してきた。

天照『あー、遊びの内容はこっちで考えるから…、とりあえず、こっ、これとか読んでよ』

と言って、天照はさりげない感じを装って、わざとらしく俺に1冊の本を手渡した。本は、綺麗に装丁され紐で綴じられたもので、表紙には現代語で『できる平安魔法』と書かれていた。

（この名前はまずいだろ）

そんな俺の心配を他所に、天照は話を続けた。

天照『サイン入りだ。どうだ。うれしさに涙も出ないだろう』

よく見ると、著者名のところに『AMVTERASU』と書いてある。

俺『これ、お前が書いたのか！』

天照『そうだよ。名前の3文字目見た？ AじゃなくてVってなってるでしょ？ これは論理記号で…』

俺『やかましい』

一瞬、この中二病に取り憑かれた残念女神の本を投げ捨ててしまいたい衝動に駆られたが、元の時代に戻るためと思い直して中を見てみた。

（意外と…、まともっぽいな）

中身は、至って真面目な入門書のようなだった。少し流し読みしただけだが、図も豊富で、説明も的確でわかりやすかった。取り扱っている内容が魔法という点が特殊だが、その点を除けば普通の本だ。

（この残念女神が、こんなまともっぽい本を書くというのは、人間…というか神様はわからないものだな）

天照『ねっ、どう？　ねっ、感想は？』

天照は、なぜか目をキラキラさせてこっちを見ている。本の感想が聞きたいのか？

俺『え？　ああ、読みやすそうで分かりやすそうな本だな。これなら俺でも魔法が使えるような気にはなるかな』

天照『そうか？　そう思うか？』

そう言うと、天照は極上の笑顔を見せて、両手で俺の手を握ってきた。なぜか目が少し潤んでいる。

（やば。可愛い）

拾巻・AMVTERASU（後書き）

∇は論理記号です。ターンAではないのです。

天照大御神といえは、古事記や日本書紀に書かれている創世神話ですが、その話は関連するネタを本文で触れたときにしたいと思っています。

拾貳・後で感想聞くからね

俺は不覚にも、この残念女神のことを、一瞬、可愛いと思ってしまった。ていうか、手を握って目を潤ませて笑顔を決めるって反則だろ。今は俺の方が身長が低かったから直撃は避けたけど、これ以上目遣いに見上げられたら、生き残れる自信がないぞ。

俺『こつ、これで魔法の勉強をしておけばいいんだな』

天照『後で、また感想、聞くからね。絶対に読んでね』

天照は感想をやたらと聞きたがっているけれど、この本を読むのは俺が初めてなんだろうかと俺はなんだか楽しそうにしている天照を見て思った。と、そこで、ふと頭に浮かんだ疑問を口にした。

俺『お前、まさか、遊べって言うておいて、この本の読者になれってこと以外はノーアイデアなのか？』

天照『エッ、ソナコトナイデスヨ？』

俺『あからさまに怪しいぞ。本を書いたんなら友達に見せればいいじゃないか。何でよりによって21世紀から赤の他人を連れてくるんだ』

天照『いいじゃない、別に。そんなのあなたに関係無いでしょ！』

思いがけず天照に逆ギレされて、俺はムツと来た。そこは、お前がキレるべき所ではない。キレるべきなのは俺の方だ。

俺『関係ないことあるか！ 勝手にこんな所に連れてこられて。いい迷惑なんだよ』

天照『いいじゃない。魔法が使えるんだよ？　すごいでしょ？』

いくらでも喜んでいいんだよ』

俺『ふざけんなよ。そんなこと誰も頼んでねーよ。いい加減にしろよ』

天照『そんな、…。魔法とか興味ない？ 嬉しくないの？』

俺『ああ。興味ないね』

さっきまでの楽しそうな表情の天照とは一転して、今にも泣きそうな表情の女神がそこに立っていた。

天照『だって、テレビとか、漫画とか、小説とか。魔法が出てくる話ばかり見てたじゃない』

俺『それはお話だから面白いのであって、自分が使うというのは別だろうが！ こんな平安時代みたいところに無理やり連れてこられた身になってみろ！』

俺は、だんだん自分が抑えきれなくなっていた。最初は夢だと思っていたこの世界。1ヶ月も経ってさすがに長いかと思っていた矢先の天照の登場、そしてこの時代に連れてこられた理由。元の時代に戻るために天照に話を合わせようと思っていたのだが、まさかこんな誰でもいいようなことのために連れられて来たとは思わなかった。そう思うと、無性に腹が立ってきた。

天照『そっか。分かった』

天照は、興奮に身を震わせる俺から目をそらして、そう言うとき、力なく宙に浮かび上がって、そのまま空に向かって去っていくようにした。

俺『あ、おい、ちょっと待て。まだ話は終わってないだろ！』

俺の呼びかけに反応せず、天照はどんどん空へと昇っていく。

俺『待ってってば。あの式神、お前が作ったんだろ。どうやって消せばいいんだ？』

天照が本当に行ってしまういそうなのを見て、俺は怒りを脇において、慌てて、どうしても聞いておかないといけないことを問いただした。昼に式神を実体化させた後、消す方法が分からなくて本当に困っていたのだ。

天照『あれは、箱に触れれば元の紙に戻るよ。それ以外のことはその本に書いてあるから』

最後の方の言葉は、ほとんど消え入るような音になって、天照は姿を消した。

(…、俺、置き去りかよ！)

俺は、再びふつふつと沸き起こってきた怒りをぶつける宛のないまま、右手に持ったままの『できる平安魔法』を眺めた。

(何でまた、こんなものために俺は連れてこられたんだ)

ふと目を上げると、天照が現れる前と同じように、ホタルは幻想的な光を灯しながら、俺の周りを飛び交っていた。しばらくそのホタルの不規則な動きを目で追う内に、俺の心の中で煮えたぎる怒りが徐々に鎮まり、さっきの出来事を冷静に振り返る余裕が生まれてきた。

俺『最後、あいつ、泣いてたな』

俺は無意識にそうつぶやくと、元来た道をまた同じように駆け抜けて、自宅へと戻っていった。

拾弐・後で感想聞くからね（後書き）

読者の皆様、いつも転生！かぐや姫をお読み頂いてありがとうございます。

つきましては、ぜひぜひ、このページの下の方で評価ポイントを入れていただいたり、感想をお寄せになったり、レビューを書いていただいたりしていただけると嬉しいですよ。

というか、そうでないと天照ちゃんが泣いてしまいます。機嫌を損なって天岩戸に引きこもってニート宣言とかされたら日本が終わってしまいます。どうか、そうなる前に。

逆にたくさん評価していただければ、天照ちゃんが喜んで、こんなことやそんなことやあんなコトまでしてくれるかもしれません！（にぽっ

それから、お気に入り登録していただいた方、評価ポイントを入れていただいた方、レビューを書いていただいた方、ありがとうございます。感想の方には直接お返事できますが、それ以外にはお返事できないので、この場でお返事に代えさせていただきます。

転生！かぐや姫、これからまだまだ続きます。今後もよろしくお願ひします。

拾参・五月雨式

翌日、京は本格的に梅雨入りした。天照が涙を見せたから雨になったのか、それともただの偶然なのかは、俺にはわからない。

昨日は、自室に戻った後、寝ている式神の頬に例の白い木箱をそつとあてると、すぐに元の紙片に戻った。式神が着ていた服に着替えて、俺の着ていた服はやはり白い木箱をあてて元の紙片に戻して、式神と一緒に箱の中にしまった。

天照の書いた魔法の本も、木箱にあてると小さくなったので、一緒にしまうことにした。唯一問題だったのは、追い剥ぎにもらった太刀だった。これは木箱にあてても小さくなることはなかったので、しまう場所に困ってしまった。

（さすがにその辺に置いておくと目立つよなー）

変な所に置いておくと、湿気って錆びてしまうかもしれないので、それなりに管理できる所に置く必要があるが、まともな部屋の仕切りもないような寢殿造りの建物では、当然タンスのようなものも部屋には置いてないので、隠せるような場所はなかった。

（仕方ない。一旦、床下に隠して、明日例の魔法の本の中に、何か便利なものでもないか確認しよう）

そう考えた俺は、太刀を床下の目立たない場所に置くと、重ね着をしていた袷あじを脱ぎ、小袖と下袴だけになって、部屋の中央に敷かれた2枚の畳の上に横たわり、脱いだ袷を掛け布団のようにして眠りについた。

せつかくだから説明しておく、この時代、床は基本的に板間だ。今風に言えば無垢の木のフローリングだ。誰がフローリングを洋室と言い出したのか知らないが、平安時代の寝殿造りの床は総フローリング仕上げだ。参ったか。

というか、そんなところに直に寝ると俺が参るので、寝るときは畳を持ってきて、寝床にするところだけに敷く。俺の場合、部屋の中央に2畳。ちなみに、平安時代にはすでに、圧縮した藁のクッションの入った現代の畳のような厚畳が存在するので、板間の上にござを布いただけというような悲惨な状態ではない。

ところが、残念なことに、布団はない。もちろん、毛布なんてももない。しかし、服を着たままで寝るのは、さすがに寝返りをうつのが苦しいので、服は脱いで下着だけになる。で、どうするかというと、脱いだ服を掛け布団として活用するのだ。これぞ、平安スタイル！

初夏だからいいようなものの、現代人の俺が冬の寒さに耐えきれるかどうかは、甚だ心許ないのであった。

朝起きた俺は、早速、例の魔法の本を読むことにした。天照には怒りをぶつけてしまったが、とはいえ俺には、魔法を学ぶことを拒否する理由がない。むしろ、ふすまの件にしろ布団の件にしろ、この時代のテクノロジーでは解決できないことが多すぎるので、それが魔法で解決できるならありがたい。

（何はともあれ、現代に帰る前に死んだら話にならないからな）

そんなわけで、今日は一日中読書に明け暮れた。途中、あまりに

読書に集中していたため、雪が心配して声をかけてきたが、心配しなくていいと追いつ返した。現代日本語の本を読んでいるところを見られると不審に思われるかも知れないからな。

まあ、それはそうと、あれだ。雪は可愛いなあ。歳の頃は16、7。現代の俺とちょうど同じ年くらいだ。こちらではもう結婚適齢期。そのうち婚約者ができて、嫁に貰われていくんだろうなあ。くそ。羨ましい。想像するだけで未来の夫に嫉妬を覚える。

そういえば、高校生男子といえば性欲のコントロールに苦労する年頃で、俺もまあナニがアレでソレだったんだが、こっちに来てからそれは全くない。雪を見ていても、可愛いなあとか幸せだなあと思うが、まあぶっちゃけそれだけだ。

思うに、心から来る感情と、体から来る感情というのがあるんだろう。推定小学1年生女子の体には、コントロールしなければいけない性欲はまだ存在しないってことだ。

（ていうことは、俺が高校生位の年齢になったら、男に対して女の性欲が刺激されるってことか？）

いかん。ヤバいものを想像してしまった。吐きそうだ。どうしてくれよう、この不快感…

（こういうときはアレだ。雪に抱っこしてもらって癒されるに限る）

素晴らしい名案が思いついた。俺って天才。ということで、早速、雪のところに行くことにした。

俺「雪」。雪」

拾参・五月雨式（後書き）

旧暦だと梅雨は5月になります。なので梅雨の別名は五月雨^{さみだれ}で、梅雨の雨のように少しずついつまでも続くものを五月雨式と呼び、梅雨の晴れ間は五月晴れと言います。そしてこの話も五月雨式に続くのであります。

平安時代は貴族は畳で寝るのですが、奈良時代に遡るとベッドが使われます。なんか、和風という言葉の意味を問い正したくなりますね。

拾肆・ あんあんあん

雪に膝の上で抱っこをしてもらいながら、俺はさっきの本の内容について考えることにした。

（魔法って言っても、俺の想像してたものとはだいぶ違うな）

天照からもらった本に書いてあった『魔法』とは、広い意味では魔法と読んでいいのかもしれないけれど、微妙に違うジャンルっぽいものも結構、というか、沢山含んでいた。といっても、俺はそっち方面の知識はさっぱりなのでどういうジャンルかよく分からない。とりあえず、中二っぽい呪文を唱えたり魔法陣を描いたりするのは全体の1割強といった程度だった。

（まあ、でも超常現象を起こすって意味では魔法だよな）

例えばあのクソ変態式神を作るのも、昨日着た狩衣とかを作るのも、あの不思議な白い木箱だって、十分にこの世の法則を超えた超常現象なわけで、魔法と呼んでもおかしくはない。

式神とかは陰陽術というほうがそれっぽいけど、それを区別することの意味があるかは別問題だ。陰陽術という名前をつけることで、何かが分かりやすくなるならそれもアリだが、あの本の中身は、カオスと言う他はないような内容だった。

例えば、火を生み出すというだけの基本的な魔法には、10通り以上の方法があって、そのどれ1つとして、何と言うか、似ていない。よくまあこんな脈絡のないバラバラの手順を考えつくものだと感心するようなものが、お互いに全く関連なく10通り以上。しか

も効果は殆ど同じ。中にはほとんど正反対の手順まで含まれていた。

（あれが全部1人で考えたものだとしたら、何かと紙一重の天才だな。確実に）

むしろ、紙一重の向こう側という気がしなくもないが、どっちだって大差はない。とりあえずここで言えることは、魔法というのはすべて丸暗記。手順を工夫して改良しようなんて努力は、100%無駄だということだ。

（あ。なんか、これ、似たようなのを知ってるぞ。なんだっけ？）

カスタマイズ不可能で、似たような機能を持った全然別のものがいっぱいあって、系統立てた分類が不可能で、この世の法則を無視して…

（…、ドラえもののひみつ道具だ）

あ、なんか腑に落ちた気がする。なんにも解決してないけど。ひみつ道具と違うのは、ひみつ道具は使い方は奇抜でも単純なのに対して、魔法は手順がクソややこしいところだな。まあ、普通はそれが大問題なんだが、

（で、俺の脳みそが四次元ポケットか）

ここでも俺の異常な高スペックが大活躍だ。もうさすがに驚かなくなってきた。

俺が1日かけて本を読んだ結果、本の中身は全部俺の頭にコピーされた。1文字残らずだ。だから、どんなに底意地の悪い手順でも

一瞬で思い出すことができる。どんな脈絡の無い音の羅列でできた呪文でも、間違えずに唱えることができる。

（問題は、この魔法をどう活用するかだな）

のび太はせっかく素晴らしいひみつ道具をドラえもんに貸してもらっているのにもかかわらず、使い方がダメなせいであの体たらくだ。もっとも、ドラえもん自身がそもそも道具の選択を間違っているという気がしなくもないが、とにかく使い方が悪ければせっかくの魔法も宝の持ち腐れなのだ。

残念なことに、高スペックなのは俺の記憶力だけで、思考力の方は大して変わっていないような気がする。例によって、記憶力は体に依存して、思考力は心に依存するということなのかな。

（まずは、あの太刀の保管方法で、次は衣食住の改善だな）

まだあの太刀は床下に隠したままだ。梅雨入りしてジメジメしてきたし、ほっとくとすぐに錆びてしまいそうだ。でも、まあ、その魔法はもう目処をつけたから今日の夜にでもやっておくとして、次に大事なのは生活環境の改善だ。平安時代風も風流でいいんだが、現代風のほうが圧倒的に快適だ。

（とりあえず、明日は結界を使って、屋敷を改良するか）

拾肆・あんあんあん（後書き）

平安時代で魔法といえば、陰陽師として有名な安倍晴明がこの時代の人です。十二天将という式神を使うとか、家の家事一式を式神にやらせたとか、奥さんが怖がるから橋の下に式神を住まわせていたとかいうエピソードがあるそうです。同時代なのでいつか登場する機会があるかもしれません。

拾伍・雪は俺の嫁!?

雪「竹姫さま?」

俺「ん? どうしたの、雪?」

雪「ずっと黙ったまま難しい顔をなさっているので、お加減でも悪いのかと」

俺「まあ、うれしい。心配してくれたのね」

(ああ、なんて可愛いんだ、雪は)

俺はとびきりの笑顔を見せて、膝の上に座ったまま、雪に体重を預けるようにもたれかかった。雪の発する良い匂いが鼻腔の奥を刺激して、慎ましかに発達した小ぶりながらも弾力のある双丘が後頭部を優しく支える。

ああ、そうだ。平安時代には素晴らしい言葉があったんだ。雪のように身の回りの世話をする女性使用人、つまり侍女のことを指すあの言葉。今こそ声を大にして言おう!

俺「雪は俺の女房(キリッ)」

雪「はい、そうですが、それがどうしましたか?」

俺「竹姫は雪が大好きです」

雪「雪も竹姫さまが大好きですよ」

雪は俺の嫁、ではないが、俺の正式な女房だ。平安時代には、貴族の侍女は、その貴族が男であれ女であれ、女房と呼ばれる。まあ、貴族でなければそもそも侍女なんていないから、つまり「侍女Ⅱ女房」だ。そして、俺の場合、雪が唯一の女房でもある。

俺の女房が雪だけしかないのには理由がある。爺は今や平安京でも有数の金持ちなので、俺の女房を増やすことなんて造作ないことで、実際、初めの頃は10人くらいの女房がいた。ところが、俺がうっかり可愛いオーラを出すとすぐに失神してしまうので、女房として仕事にならなかったのだ。

そんな中、雪は唯一、俺の可愛いオーラの直撃を食らっても失神しなかった。あんまり雪が可愛いので、一度、うっかり全開をぶつけてしまったことがあって、その時はかなり息が苦しうだった（顔は上気して恍惚としていた）が、失神せずに耐えていた。これまで全開で失神しなかったのは雪だけだ。

そういうわけで、最終的に、雪が唯一の女房となり、それ以外の使用人は必要なときだけ俺の前に姿を見せるという体制になったのだ。爺や婆は歳のせいかわ結構すぐに失神してしまうので、俺にとって雪は唯一全力で甘えられる相手でもある。

だから、俺は雪が大好きだ。

俺「雪はいつかお嫁に行っちゃうんですか？」

雪「雪は竹姫さまが一番ですから、ずっと一緒にいますよ」

（可愛いーーーーっ）

ああ、俺はまさに声を大にして叫びたい気持ちだ。雪は可愛いと。

若干、雪の返事に、年頃の女子としてどうなのよ、と思わなくもないし、もしそれが本音だとすると倒錯的なナニかを感じなくもないが、そんなことは些細なことだ。

俺「竹姫は雪のお嫁さんになる！」
雪「ッ…！」

しまった。やってしまった。つい興奮して可愛いオーラを全開に
してしまった。雪の肩がプルプル震えて、息遣いが荒く不規則にな
っている。

俺「雪。大丈夫？ 雪」

雪「…、だ、大丈夫、…、です。…、た、竹姫さま、に、…、そ
う言ってもらえて、…、幸せです」

反省した俺は、雪が落ち着くのを待って、自室に戻ることにした。

拾伍・雪は俺の嫁！？（後書き）

女房とは、今風に言うともメイドですよ。メイド。メイドさん。メイドというより、ちよつと身分が高いイメージですが。

女房は、邸宅内に専用の部屋を与えられて住み込みで働きます。天皇、皇族、公卿に仕える女房はそれに見合った身分が与えられ、中流貴族の娘になることも多くあり、教養のある女性も少なくありませんでした。

「雪」は女房名にようぼうなといって、本名とは別に付けられた女房としての通り名です。普通、女房名は実家の代表者の官職にちなんだ名にするのですが、雪の場合は「俺」が名付けています。

ちなみに、女房とは別に、女御にようごという女性もいて紛らわしいですが、女御は天皇の側室のことです。

拾陸・呪文も魔法もあるんだよ

その夜、皆が寝静まるのを待って、俺は床下に潜り込んだ。寝殿造りの建物は高床の構造になっているので、大人はともかく子どもの身長なら難なく潜り込める。おまけに俺の目は暗闇でも周りが見える特別製なので、すぐに隠してある太刀を見つけて部屋に戻った。

（人生初の魔法だあ）

天照にはリアルな魔法なんて興味ないと言ったが、あれは嘘だ。

いや、人生と引き換えにしてまで興味があるわけではないという意味では本当だが、ノースクで使えるなら使いたいに決まっている！ それどころか、俺の場合、もうすでにシヨバ代は支払い済みだ。使いまくって元を取る以外の選択肢は存在しない。

さて、太刀だ。これをあの木箱の中にしまえるようにしたい。狩衣や魔法の本と同じ魔法をかけることができれば便利なのだが、あいにく太刀に後付けでその魔法をかけるのはちょっと面倒みたいだ。なので別の魔法を使うことにした。

山ほどある脈絡のない魔法の中から俺が選んだのは、装備品を手のひらサイズに小型化するという魔法だ。特に魔法の名前はないらしいので、アクセ・シュリンカーと俺が命名した。なぜ平安時代なのに英語かって？ 日本語だと俺の命名センスだとダサくなるんだ。言わせんな恥ずかしい。

アクセ・シュリンカーは、魔法の中では簡単な部類だ。器用な奴なら練習次第ではできる奴もいるかも知れない。まず、小型化した

いものを手に持って目の高さまで持ち上げて、そして、呪文を唱える。

呪文は約500音くらいの脈絡のない音の羅列。これを息継ぎなしで50秒以上53秒以内に唱え切れれば成功で、それ以上かかったり、それ以下で終わったりすると失敗だ。もちろん、間違えても失敗になる。平均1秒約10音。結構な早口言葉だ。

俺「○※&%×\$…」

失敗。

俺「○※&%×\$…」

失敗。

俺「○※&%×\$…」

失敗。

（結構ムズいな、これ）

うーん。俺の身体能力なら一発で決まると思っていたのだが、意外にうまくいかない。というか、よく考えたら、時計もストップウォッチもないから、50秒がどのくらいの長さか分からないじゃないか。さすがに当てずっぽうでは当たらないか。

（…、そういえば、前に、物理の先生が、1メートルの高さからものを落とすと、地面に落ちるまでに約0.5秒とか豆知識を期末試験に出して、ブーイングを受けてたな）

俺の身長はだいたい120センチメートルくらいとすると、鼻の高さくらいから落として、落ち切るまでに5音言えたらいい？ 何回か練習して、後は、俺の身体能力でなんとかなるかな。

俺はもう一度床下に降りて、手頃な小石を一つ拾って、部屋に戻った。

（よしやるか）

俺は小石を顔の前に持ちあげて、そして落とした。

俺「○※&%×\$…」

（ちょっと遅い）

俺「○※&%×\$…」

（今度はちょっと早い）

俺「○※&%×\$…」

（OK。じゃあ本番行くか）

俺「○※&%×\$…」

俺が呪文を唱え終わると、目の前に掲げていた太刀が光を発して、次第にその光を発する元が小さくなって行き、光が消える頃には目の前に掲げていた太刀は消えていた。握っていた手をゆっくりと開くと、手のひらサイズに縮小した太刀が現れた。

（すげ。成功した）

思わず顔がにやけてくるが、誰も見ていないから隠す必要もない。
そのまましばらく小さくなった太刀をいろんな角度から見てもたり、
振り回してみたりして、ひとしきり遊んだ後に例の箱に閉まって、
俺は横になった。

（明日は、結界を張るぞー）

明日が楽しみだ。

拾陸・呪文も魔法もあるんだよ（後書き）

この世には、呪文も魔法もあるんです！
ただ、ちょっと無理ゲー
なだけなんです！

拾漆・カラスの勝手でしょ

（ちよつと、背が高くなったかな？）

朝起きて服を着て、俺は思った。成長の速度があまりに早いので、すぐに丈も袖も短くなってしまふ。この服も今日で最後だろう。

さて、今日は居住環境の改善のために、結界を張ろうと思う。そのためにはいくらか準備が必要だ。

結界は、魔法の中ではかなりポピュラーな部類で、極めてたくさんバリエーションがある。難度もさまざまで、手頃なものから大掛かりなものまであるが、効果の割に簡単なものが多い。

俺が使おうと思っているのは、まさに居住空間を改善するためにあるような結界だ。これを使うと、室内の目隠し、調光、空調、調湿、清掃、防音、防虫、防臭、防犯などの機能を自由に設定できる。例によって名前はないので、居住結界と俺が名づけた。なぜ英語じゃないかというと、結界に相当する英語が思いつかなかったからだ。言わせんな恥ずかしい。

この結界を作るには、頂点に護符を配置する必要がある。結界は、敷地全体、建物全体、部屋の3重に設定するつもりなので、四角形の結界が3つ、計12枚の護符が必要になる。少し大きめの紙を、書き損じも考えて30枚ほど雪にお願いしておいた。

さて、紙を護符に変えるには、紙に絵や字を書かないといけないのだが、そのための墨に特殊なものを使う必要がある。なに、そんな大したものではないのだが、カラスの糞と黒猫の目くそを墨に溶

いてやらなければならないのだ。

（もうちょっと上品な材料を使おうという発想はなかったのかね）

今日は朝からまだ雨は降っていない。とはいえ、空は曇っているし梅雨でもあるので、いつ降ってくるか分からない。

（さっさと集めてしまおう）

俺は、いつものように桂の裾をたくし上げ、腰紐を1本タスキにかけて袖を縛り、例の箱から足駄を取り出すと、庭に降りた。庭の隅の方の木に、カラスがよく止まっていることは知っているので、まっすぐそちらに向かった。

（できたてじゃなくても、落ちてるやつでもいいんだよな、多分）

木の枝にはカラスが3羽止まっていたが、そっちには目もくれずに地面に落ちている糞を拾おうと下を見たまま木に近づいた。

カラス「アホー。アホー」

ぼと。ぼと。

（あれ？ 何か背中に落ちてきたような）

俺は事態を把握するために、頭上を見上げた。

カラス「アホー。アホー」

俺の視界に映るのは、青々と茂る木の枝、アホ面で鳴くカラス3

羽、そしてそのカラスから落ちてくる何かの塊だ。

ぼと。

その塊は、吸い込まれるように俺の額に命中して、不快な感触を俺に与えた。

俺『ふっ、ふ、ふふ、ふふふふふふふふ』

別に何かが可笑しいわけでもないのに、思わず笑いが込み上げてくる。俺の心のなかに、カラスの羽よりも黒い何かが沸き起こってくるのがはつきりと感じられた。

カラス「Ah？」

拾漆・カラスの勝手でしょ（後書き）

墨には松ヤニから作る松煙墨と油から作る油煙墨があるのですが、松煙墨の方が古くから作られています。奈良時代には貴重品だった墨も、平安時代には松煙墨が大量生産されるようになって広く普及するようになりました。同時に平安時代には世界に先駆けて油煙墨が開発され、次第に墨の主流が油煙墨に変わっていきます。

舞台の設定では、松煙墨が普及してきた頃で、油煙墨はまだ普及していません。なので、今回使われるのは松煙墨の方です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8876x/>

【今は昔】転生！かぐや姫【竹取の翁ありけり】

2011年11月29日11時46分発行